



### 23、演奏活動

—多久に来てから、家族と暮らせるようにはなりましたが、いろいろと忙しくなり面倒なことも増えたのではないですか。趙勇さん自身の演奏活動はどうなりましたか。

多久に来てからもずっと趙国良さんたちとの演奏活動は続いていました。また、「財団法人孔子の里」の常務理事である林口彰先生の講演会などでも演奏をさせてもらうことがたびたびありました。

当時、私と江舟さん（聖廟の管理人室在住）は、名目上は孔子の里の職員となっていました。そこでしなければならないことは何もありませんでした。「財団法人孔子の里」の初代常務理事は野方辰美さんで、平成8年からは林口彰さんに替わりました。そのころ林口さんの提案で、二人とも用事がないときは毎日ここ（東原庫舎）へ出勤することになったのです。（これにはいろいろなきさつがあったのですが、複雑になるのでここでは触れないでおきます。）私たちは毎日ここに来て、それぞれ別々の部屋で楽器演奏の練習などをしていました。昼か午後2時ぐらいまではここに居ました。

林口さんは、元社会教育関係の仕事をされていて、当時もあちこちで講演会の講師として活躍されていました。その講演会に私たちも一緒に行って演奏をしたこともありました。私たちを多くの人に紹介し、私たちの音楽活動の場を広めるためです。

—趙国良さんとの演奏会は今までと同じく3人のグループですね。

そうです。しかし、趙国良さんの音楽活動は、私たちとの活動以外にも広がっていて、一人での演奏会も多かったようです。その後、創価学会の「民音」などの支援を得て、活動の場は全国に広がっていたようです。94年11月に私も一度だけ国良さんと一緒に、福岡ドームで行われた創価学会の「アジア青年平和音楽祭」のイベントに出演したことがありました。ドームは満杯で、池田大作会長が入場すると大歓声上がり、わたしは毛沢東を迎えるあの文化大革命の時の様子を思い起こしました。

もちろん、今までのように趙国良さんと江舟さんと私の3人での演奏会は続けていました。その演奏会のマネージャーは国良さんの奥さんである愛民さんがされていました。私は新しく取り入れた日本の曲などの編曲も受け持っていました。

そのころ多久市から国良さんに、多久聖廟をテーマにした多久市の曲の作曲依頼があったのです。国良さんは曲の一部を書いた後、全てを私に投げかけられました。私は、国良さんの書いた部分を元にして、何とか多久市の曲を作り上げたのです。この件に関わって、愛民さんの独断的な行動があり、私が意見したこともありましたが。このようなことがあってから、愛民さんは私をだんだん遠ざけるようになり、演奏会からも外されるようになりました。そのようにして平成8～9年ころまでは3人の演奏会もなんとか続けましたが、10年以降は国良さんとの演奏会活動は完全になりました。その後は、林口さんの講演会などで江舟さんと私の二人だけの演奏会や、私一人だけの演奏会となっていったのです。

一人だけの演奏には、今まで編曲していた曲をすべて編曲しなおさなければなりません。これも大変でした。

## 24、「荒城の月」編曲

——いよいよひとりだけでの演奏活動となるのですね。

そうです。国良さんたちとの演奏会がなくなると、時間的にも余裕ができました。そこで、今まで演奏した曲や、その他多くの日本の曲を勉強しなおしました。そして、この楽器・楊琴一台だけでの特徴を出すための方法を考えました。そのための楊琴演奏の技を工夫し、繰り返し練習しました。これには多くの時間をかけました。

——楊琴という楽器の可能性を広げたのですね。

そう言えるのかどうかはわかりませんが、楊琴演奏の技を工夫しました。それと同時に楊琴だけで一曲を完成させるための編曲を考えました。楊琴の演奏技術と編曲の方法で音楽空間を広げ、深めたいと思ったのです。

——趙勇さんの演奏会では童謡がいつも入っていますね。日本の童謡は好きですか。

童謡や日本の歌曲の中にはいいものが沢山ありますね。そんな曲を私一人の演奏のために編曲をしました。この中のいくつかは演奏会に必ず入れています。

この中でも特に「荒城の月」の編曲は思い出深いものがあります。私は日本に来てから今まで様々なことがありました。そこには楽しかったこと、悲しかったこと、頑張ったことなどいっぱいありました。この曲には、そのような時々の自分の思いを込めて編曲しました。編曲しながら立ち止まっては当時の自分のことが思い出されて涙ぐむこともありましたが。そのような気持ちを楊琴演奏の技と編曲の仕方に込めました。自分の力を精一杯傾けました。完成した時には涙がぼろぼろこぼれました。

——そう、この曲が完成して間もなくのころの演奏会だったと思います。聴く人の何人もが涙ぐんでいるのを見たことがあります。趙勇さんの「荒城の月」は聴く人の心に響くのです。

ありがとうございます。私も演奏会でそんな光景を何度も目にすることがあります。私自身もこの曲を演奏するときには、涙がこみ上げてきます。それだけ強く私の思いを入れたのです。演奏会の後では、この曲の感動を私に語ってくれる人もありました。

この曲以外にも、日本や中国の曲を楊琴だけの演奏用に編曲しました。一回のコンサートを楊琴だけでできるようになりました。演奏の後で、とても一台の楽器だけの演奏とは思えないとか、編曲が素晴らしいと感想を話してくれる人もありました。

## 25、来日当初の王艶さん

——ここまで、趙勇さんが日本にご家族を呼んで、多久に落ち着くまでのいろいろなお話を聞いてきました。話は少し前後しますが、奥さんの王艶さんは来日当初大変とまどわれたのではないですか。趙勇さんも、子どもさんと奥さんを日本の生活に慣れてもらうためには大変だったと思います。

そうです。家族を呼んだのは平成3年10月22日でした。子どものことは先に話したように、すぐ学校にもなじんで行きました。

王艶さんは最初のころ、一人では家の外に出られなかった。言葉は分からないし、日本のことは何もわからない。私が一緒に連れて買い物などに行っていました。そんな中で少しずつ日本の習慣なども教えていました。中多久のアパートでは、近所の奥さんたちにも紹介して私が通訳をして話すこともありました。

彼女は、中国で出された日本語会話の教本を持って来ていました。それなども使って、家では私が教えたりしていました。私は、一日でも早く彼女に日本語に慣れてほしいという思いがありました。だけど、短時間では難しいことも分かっていたのですが、子どものことと王艶さんのことで、しばらくは大変な時期もありました。

そうですね。2～3ヶ月たったころ王艶さんは中国に帰りたと言ったことがありました。中国では友だちも沢山いて、おしゃべりができた。ここでは毎日同じ環境で、目の前にはいつも主人が居るだけで何も変わらないと言う。一番つらいことは日本人に接しても、うまく言葉が出ないし、友達がないということでした。

——王艶さんは、もともと琵琶奏者だったですね。演奏活動などはできなかったのですか。

とても来日したばかりでそんなことはできませんでした。しばらくして、相知町にお住まいで当時県庁にお勤めだったと思いますが、小柳勉さん（現玄海町教育長）の計らいで、相知町のお祭りの時に王艶さんと二人の演奏会を作ってもらいました。公民館で2～300人の会場だったと思います。

この演奏会の後、ちょこちょこと二人の演奏会も持てるようになりました。例えば、黒髪山の近くの町（山内町？）で、大正琴の先生の招きで演奏したこともあります。

——ちょこちょこでも演奏会が持てるようになったことは、王艶さんにとっては大変良かったのではないですか。

そうです。毎日同じ人の顔ばかりを見ているよりは、多くの日本人に接して日本のことも少しずつ分かってきたようです。日本語にも少しは慣れてきたようですが、なかなか自分ではうまく話せない。このころの王艶さんの気持ちは、私にもよく分かります。それから半年ほどすると言葉も少しはできるようになって来ました。

そのころ、家で食事の時などに三人でよくこんな冗談を言い合っていました。「今からすぐ中国へ帰りたい人は手を上げてください」、すると王艶さんが手を上げます。そして「中国へ帰りたい人は手を上げてください」、すぐ長男と私が手を上げます。「二対一で私たちは中国には帰れま

せん」となるのです。長男は帰りたくなかったのです。日本の学校が気に入っていたのです。

こんな王艶さんも、毎日家では子どもと私のために愚痴一つなく家事をこなしてくれていました。更には、私のいうこともみんな受け入れて、子どものために思い、よく頑張ってくれました。王艶さんは本当に優しい。

## 26、王艶さんの活躍

— 私たちも長く王艶さんとお付き合いをして来て、いつもそれは感じていたところですが。王艶さんは優しいですね。日本の女性が持っていたような優しさというか・・・そんな優しさを感じます。

そこで、私がやってよかったと思ったことがあるのです。それは丁度そのころ、多久市にいわゆる中国残留孤児の家族がたくさん住むことになったのです。東多久別府の市営アパートです。多いときは7～8世帯ありました。

その時、県から私に彼らの自立指導員になってくれないかという依頼がありました。孤児の家族が早く日本社会になじみ、自立できるように援助をする仕事です。わずかですが手当もありました。私はそれを引き受けました。

当時、彼らは日本のことは何もわからず、みんな生活保護を受けていました。そんな彼らに日本の暮らし方を教え、日本社会の中で自分の適性を見つけて生活保護を脱し、早く自立できるように支援するのです。そのためには、彼らの家を訪問し、彼らの話を聞き、いくらかの助言をするというのが主たる仕事です。私はこの仕事のときには、この仕事の意義をしっかりと伝えて、いつも王艶さんを同道するようにしました。

彼女はこれによって中国語で話し、交流できる場面ができたのです。ただ彼らは中国各地方から来ているので、地方の言葉（方言）があつて分かり難いところもありました。しかし、王艶さんにとっては中国語でしゃべれて、少しは楽しくなったようです。

この仕事を続ける中で、私に代わって彼女にもいくらか分担してもらうことを考えました。そのためにはもう少し日本語が上達することと、どうしても車が必要になります。そこで以前に話したように、私と同じ大町自動車学校に通い平成7年に免許証を取得し、すぐに軽自動車を買いました。

— そうでしたね。この車は長男英傑君の久留米の学校とか試合の応援に大変活躍したと聞いていましたが、それだけではなく、この仕事でも王艶さんと共に働いたのですね。

そうです。この車で必要なときには彼女一人ででも家庭訪問ができるようになりました。後には彼らを連れて、仕事の紹介で多久や佐賀の職業安定所（ハローワーク）などにも何回も通っています。この車が彼女の世界を広げてくれたのです。

この仕事を通して彼女の気持ちも明るく安定して行ったと思います。私たちは孤児の家族を訪問し、日本文化や日常生活のルールなども教えて回りました。

— 大変な仕事だったのですね。この間には王艶さんの日本語も大分上達したのではないですか。

そうですね。彼女の日本語が上達したのは、なんと言っても日本人と接する場面が多くなったことです。

いろいろありますが、先ず一つは中多久から中島会館に引っ越したことです。先に話したと思いますが、王艶さんを夜間の管理人として雇ってもらったために私たちはここに住むこととなったのです。ここには笹沼松子さんという方が、昼間の管理人として通って来ておられたのです。会館で特に行事がないときなど、笹沼さんは王艶さんと呼んで日本語で話しかけ、二人で過ごす時間が

多かったのです。そんな中で王艶さんの日本語も上達していったのです。笹沼さんからは言葉だけでなく、多久のことや日本の生活習慣などいろいろと教えてもらったのです。

次男の英初もここに来てから生まれたので、笹沼さんにはずっとお世話になり、我が子のように可愛がってもらいました。英初も笹沼さんには大変なついていました。この笹沼松子さんと日常生活を通してのお付き合いで、日本語も上達していったと思います。

そのころ、会館では編み物教室が開かれていて、それにも参加していました。王艶さんは中国でも私のセーターなど編んでくれていましたので興味があったのです。中国での編み方と日本の編み方には違いがあって、問われて中国の編み方を教えたりもしていました。ここでは日本の女性の仲間もできて、日本語でも楽しく交流できるようになったのです。

#### ——やはり多くの日本人と接することで日本語も身について行ったのですね。

同時に、日本人の友人もできて、楽しく日本でも暮らせるようになって行ったのです。

また、平成8年には林口常務理事の発案で、王艶さんの中国料理教室が発足しました。大きなポスターまで作られ、ワンコイン（500円）の参加料で募集されました。多久市以外からも参加者があり、30人以上集まったと思います。林口さんのねらいは、多久市民に異文化交流の場を作るということと、王艶さんが楽しく料理を教えながら、わずかでも収入を得られればというところでの発案だったのです。

その他、中島会館では私が講師をする中国語教室が開かれていましたが、ここでも私に代わって王艶さんに務めてもらうこともありました。

このような暮らしを続ける中で、中国に帰りたいたいという気持ちがあった王艶さんも、いつしかだんだんと多久が好きになってきたのです。

王艶さんは中国にいるときから料理作りは好きで、興味を持っていたのです。

父親は中国での調理師免許を持っている人です。父が家で料理をするときは王艶さんも手伝いながら、いろいろと教えてもらっていたそうです。それで中国料理には詳しくて、日本に来てからは和食についても関心があります。だから、和食の料理の本もたくさん買って、実際にいろいろ作って試してみています。

その中で気づいたことは、味も違うがやはり中華料理は油を多く使い過ぎているということでした。そこで、だんだん油を控えめにして、味は美味しくてさっぱりした中華料理ができたということです。今では、中華と和食の作り方を混ぜていろいろな味を工夫しています。

餃子の作り方も中華は皮が厚い、日本は大変薄い。食べ比べると中華は味があり、日本のは味がない。中華は一つ一つ手作りで、日本のは機械での大量生産でしょう。王艶さんも日本人好みに皮を少し薄くしながら味のある餃子を作るようになりました。

(2015、3、24)